

2025年度
浜松市立看護専門学校
一般入学試験(1期)問題

国 語

《 注 意 事 項 》

- 1 試験監督の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 2 解答用紙には受験番号と氏名を必ず記入してください。
また、受験番号を直下のマーク欄にマークしてください。
- 3 解答の際は、各問題で選んだ解答番号をマークしてください。
- 4 試験中に問題冊子の落丁・乱丁に気づいた場合は、手を挙げて、試験監督に知らせてください。
- 5 試験中の途中退室は原則として認めません。
ただし、気分が悪くなった場合やトイレへ行きたくなった場合は、手を挙げて、試験監督の指示に従ってください。
- 6 問題冊子及び解答用紙の室外への持ち出しは禁止します。
- 7 試験終了後、問題冊子及び解答用紙はすべて回収します。

第1問 次の文章は、鹿毛雅治『モチベーションの心理学』（中公新書2022）からの一文です。本文をよく読んで、以下の問いに答えなさい。

「急ぐ」と思ったら、身体はすでに走りはじめていた。

このような体験はないだろうか。振り返って考えてみてほしい。「急ぐ」という判断は、「走る」という行為に先行していただろうか。われわれは、「急ぐ」と思ったから走り始める」というように、(一)意識が行動の原因だと信じているが、それは本当だろうか。

たとえば、あなたが自動販売機で缶飲料を買おうと思い、目の前のディスプレイを眺めて何を飲もうかと迷った末に、「オレンジジュース」を選んだとしよう。あなたはこの意思決定こそが、その後の行動の起点になっていると信じているはずだ。

しかし、事実は異なるという。「オレンジジュースにしよう!」という判断よりも先に、あなたの眼球は動きだし、オレンジジュースのディスプレイをすでに(二)サヨウシしているというのだ。つまり、オレンジジュースを選んだのはあなたの視線なのである。

このように意思決定(選好判断)より前に、視線が無自覚のうちに好きなほうに傾くという現象は、視線のカスケード現象と呼ばれ、広く知られている。「オレンジジュースにしよう!」という意識(意図)が行動の原因であれば、それが時間的に先行していなければならない。A 実際には、神経系の反応や、それに伴う無意識な動きよりも後に、その意識が生じていることになる。

にわかに信じがたいがもしれない。「意識が行動を決めている」という常識にそぐわないし、何よりわれわれの直観に反しているからである。

実際、心理学者たちもこの事実の発見に驚き、戸惑った。「人間は意識に基づいて行動する合理的な存在だ」と、彼らも信じていたのである。

1980年代以降、われわれの非意識的なはたらき(潜在的認知)に関心が向けられるようになる。とりわけ、迅速性、効率性を特徴とする自動的なモチベーションの研究が盛んになるにつれ、われわれの日常で非意識過程が果たす役割が次々に明らかにされてきた。心理学界において、これは「オートマティシテイ(自動性)革命」とも呼ばれる歴史的な出来事だったのである。

一方、われわれの常識の通り、意識が行動の原因である場合も多いことが実証されている。「意識が先か、行為が先か」という二項対立的な問いに大きな意味はない。人は、意識、非意識両方のプロセスを、時と場合に応じて使い分けているのである。

2002年にノーベル経済学賞を受賞したダニエル・カーネマンは、意識と非意識の性質やはたらきを二重プロセスと呼んでいる。

まず、われわれは誰でも2つのシステム、B、システム1とシステム2を持っているという。システム1とは、速い思考、つまり、自動的に高速ではたらき、努力はまったく不要か、必要であつてもわずかで、自分がコントロールしているという感覚が一切ない非意識

的な「自動操縦モード」を指す。それに対して、システム2とは、遅い思考、つまり、時間をかけて注意を傾けたり、熟考が必要だったりする際に起動する「意識的で努力や自制が必要なモード」を指す。

システム1とシステム2は役割を分担することで、問題を効率的に解決する。a は、印象、直観、意志、感触といったものを絶えず生み出してはb に供給する。一方、c は、d が提供する情報や、それが生み出す無自覚な行動を監視し、制御する。システム1が困難に遭遇すると、システム2が応援に駆け出され、問題解決に役立つ⁽⁶⁾ 合理的で的確な処理を行うというわけである。

たとえば、驚いた直後に注意深く観察しようとしたり、怒っているときであつても礼儀正しく振る舞ったり、夜に車を運転しているときに警告を発したりするのは、e に対するf によるはたらきである。また、食習慣の改善のため、甘いおやつばかりをつい食べてしまうといった悪癖を断ち切るためには、システム2による意識的な努力が不可欠になる。2つのシステムは以上のような役割分担によるハイブリッドな仕事をしてくれることで、われわれの生活を支えているのである。

元来、人は生物として、心身のエネルギーを節約し、温存し、効率的に使うようにできている。特に、やる気や意欲といったモチベーションは心身のエネルギーを消費するので、オンとオフの切り替えが重要になる。やみくもにやる気を発揮しエネルギーを浪費するのは合理的ではないし、そもそも限界があるのだ。そこで、意識と非意識の二重プロセスは、最も少ない努力ですむ方法を選ぶ「最小努力の法則」に基づいて機能する。努力に要する心身のエネルギーは限りある貴重なりソースなので、システム2への過大な負担を避け、システム全体としてエネルギーを節約する⁽⁷⁾ 二重プロセスは、生き物としてのわれわれにとってきわめて適応的なのだ。非意識的に行動を起こすシステム1は、モチベーションの効率化に大いに貢献しているというわけである。

カーネマンは2つのシステムを「役者」に例えている。映画化するなら、システム2は必要な努力以上のことはやりたがらない愈けもので「脇役」、システム1こそ勤勉に仕事する「主役」なのだ、と。

*目標説や*自信説のように、これまで本書で紹介したモチベーションの多くは意識の内容やプロセスに着目する「システム2型」であり、そこでは意識が行動を左右すると考えられていた。本章ではやや⁽⁸⁾ 趣を変え、「システム1型」のモチベーションについて、非意識過程という観点から紹介していくことにしよう。

モチベーション研究において潜在的認知が着目されるようになったのは、1990年代中盤以降である。注意の向け方、知識の⁽⁹⁾ ケンサクといった非意識的な情報処理プロセスを通じて行動が自動的に生じたり、意図、判断、評価、計画といった意識を媒介せずに行動が調整されるなどの現象が次々に明らかにされてきた。このように本人に無自覚のまま環境の刺激が直接行為を引き起こすプロセスは、今日、潜在的モチベーションと総称されてい

る。

たとえば、オフィスに着くやいなやカバンをロッカーにしまって、マグカップにコーヒーを淹れると、パソコンの前に座ってメールチェックを始める。われわれはその一連の行動を必ずしも意識的に行っているわけではない。⁽³⁾何か考えごとをしながらであってもスムーズに実行できているはずだ。オフィス環境から感受する刺激に応じて、適切な行動が知らず知らずのうちに⁽⁴⁾湧きなく起っているのである。

そのしくみは、われわれの脳を構成するネットワーク状の神経回路にあると推定されている。

- A つまり、潜在的モチベーションとは、環境からの刺激が「引き金」になって非意識的に目標指向的な行動が生じるという現象だといえる。
- B すなわち、意識を媒介せずに、知覚がしかに行動とリンクするようにプログラムされた目標システムが神経回路の網の目の中に組み込まれており、それが環境からの刺激に即応して起動する。
- C われわれには、このような「自動性」を特徴とする「システム1型」のモチベーションシステムが装備されているのである。
- D そのおかげで、本人に自覚のないままそのリンクが自動的に作用して、努力することなしに行動が生じたり、方向づけられたりするというわけである。

そこで重要な役割を担っているのが自動評価だろう。自動評価とは、刺激を見た瞬間に意識を媒介せずにその良し悪しをとつちに判断するシステム1のはたらきを指す。それは、注意深さや思慮深さといった意識的な努力を特徴とするシステム2による評価とは対照的である。

たとえば、専門家の直観による問題解決の背景にはいわゆる「暗黙知」（無意識、無自覚のうちにはたらく知識や技能）があるとかねてより指摘されてきたが、これも自動評価によるはたらきなのだといえる。プロと呼ばれる人たちの即興的な判断や行動は必ずしも意識的であるとは限らない。彼らの卓越したパフォーマンスは、⁽⁴⁾豊富な経験に基づく自動評価のなせる業なのである。

*目標説：目標を実現するために、努力するモチベーションが生じるという説。

自信説：成功する自信があることでモチベーションが生じ、高まるという説。

問一 傍線部〈a〉・〈b〉・〈c〉の漢字と同じ漢字を含むものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい。

〈a〉ギョウシ

① 妹にニンギョウを渡した
 ② 名店のギョウレツに並ぶ
 ③ 低温で水がギョウコする
 ④ びつくりギョウテンした
 ⑤ 立派なギョウセキを残す

〈b〉チニシ

① 機械を工場にセツチした
 ② 両者の回答がイッチする
 ③ 微細な振動をケンチする
 ④ 待ち合わせにチコクした
 ⑤ きわめてコウチな作品だ

〈c〉ケンサク

① 辞書のサクインを調べる
 ② 事業計画をサクテイする
 ③ 地面のクツサクを行った
 ④ 今年の麦はギョウサクだ
 ⑤ 長年の試行サクゴの結果

問二 漢字の読みをひらがなで書いたとき、傍線部〈A〉・〈B〉の読みと最初の一字が共通するものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい。

〈A〉趣

① 興る
 ② 慕う
 ③ 捌う
 ④ 映す
 ⑤ 催す

〈B〉滞り

① 企む
 ② 推す
 ③ 掃く
 ④ 診る
 ⑤ 点る

問三 傍線部(1)「意識が行動の原因だと信じているが、それは本当だろうか」とあるが、この疑問に対する回答として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 意識に上る前から行動を始めている
- ② 意識は常に行動の原因となっている
- ③ 意識と行動はほぼ同時に生じている
- ④ 行動が意識より先行する場合もある
- ⑤ 行動と意識の間には因果関係がない

問四 空欄 A ・ B に当てはまる語句の組として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- | | A | B |
|---|------|------|
| ① | または | たとえば |
| ② | そして | あるいは |
| ③ | だが | やはり |
| ④ | そのため | つまり |
| ⑤ | しかし | すなわち |

問五 空欄 a ～ f にはそれぞれ「システム1」「システム2」のいずれかが入る。その組合せとして最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- | | a | b | c | d | e | f |
|---|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| ① | システム1 | システム2 | システム1 | システム2 | システム1 | システム2 |
| ② | システム1 | システム2 | システム2 | システム1 | システム1 | システム2 |
| ③ | システム1 | システム2 | システム2 | システム1 | システム2 | システム1 |
| ④ | システム2 | システム1 | システム1 | システム2 | システム2 | システム1 |
| ⑤ | システム2 | システム1 | システム1 | システム2 | システム1 | システム2 |

問六 傍線部(2)「二重プロセスは、生き物としてのわれわれにとってきわめて適応的なものだ」とあるが、その理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 常は無意識的に行動することはエネルギーを無駄に浪費することになるから。
- ② 意識と非意識を切り替えることで生きるためのエネルギーを温存できるから。
- ③ モチベーションを効率化する方法においても生き物としての限界があるから。
- ④ 「最小努力の法則」によってシステムへの負担も減らすことができるから。
- ⑤ やる気や意欲を発揮することでエネルギーを効率的に使えるようになるから。

問七 傍線部(3)「何か考えごとをしながらであってもスムーズに実行できている」とあるが、その理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 外部環境からの刺激に応じて意識的な行動が引き起こされているから。
- ② 何か考えごとをすることも一連の行動の中に組み込まれてしまうから。
- ③ 意識の上では一連の行動と別の考えごとが明確に分離しているから。
- ④ 潜在的モチベーションによって一連の行動が自動的に生じているから。
- ⑤ 最初の行動を意識的に行うことで一連の行動が自然に続いていくから。

問八 四角枠内のA～Dを並べ変えるとき、適切な順序となるものを、①～⑤より一つ選びなさい

- ① A → B → D → C
- ② A → C → B → D
- ③ B → D → A → C
- ④ B → C → D → A
- ⑤ C → D → A → B

問九 傍線部(4)「豊富な経験に基づく自動評価」という記述から導ける論として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 自動評価の判断力は経験によって成長させられるということ。
- ② 自動評価は経験が豊富なほど意識的なものになるということ。
- ③ 自動評価に頼り続けていると判断力が欠けていくということ。
- ④ 自動評価も豊富な経験も同じくらいに重要であるということ。
- ⑤ 自動評価を意識化して豊富な経験を積むのが大事ということ。

問十 本文の内容と合致していないものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 視線のカスケード現象においては、自分が自覚していないうちに視線が先に選好判断を行っている。
- ② 自動的なモチベーションの研究では、「人間は意識に基づいて行動する合理的な存在」であることを前提としている。
- ③ われわれ人間は、システム1とシステム2の両方が役割分担してはたらく二重プロセスによって思考している。
- ④ システム1型のモチベーションを説明する場合、意識の内容やプロセスに着目する目標説や自信説は適していない。
- ⑤ 専門家の直観による問題解決の背景には、非意識的かつ迅速に判断するシステム1のはたらきが存在する。

第2問 次の文章は、小川洋子『川と私』（河出書房新社2021）からの一文です。本文をよく読んで、以下の問いに答えなさい。

なぜか大切な風景の記憶の中には、必ず川が流れている。悠々とした静けさをたたえながら、風景の真ん中に横たわっている。それは私の記憶を受け止める支柱であり礎である。

生まれた家は旭川のすぐ近くにあった。裏口から走り出て短い坂道を登ると、目の前がぱっと開け、そこにお城と土手と旭川がいつべんに姿を現した。その土手を降りたところにある河原で、弟や従兄弟たちといつも転がるようにして遊んでいた。河原へ降りる階段が土手沿いに何ヶ所があるのだが、そんなものには目もくれず、膝小僧がすりむけるのもお構いなしに、文字とおり競い合ってコロコロ転がっていた。自分の身体で押し潰した草々の青っぽい匂いと、回転する^(a)シカヤの向こうに横たわる旭川の姿が、今でも忘れられない。

高校生になって、河原で遊ぶには大きくなりすぎると、私は自転車で、川のこちら側からあちら側へ、橋を走り抜けるようになった。あちら側には大きな本屋さんがあった。口うるさい親や、友だちのいない学校から脱出し、本の海へ逃げ込むように、一生懸命自転車を漕いで川を渡った。本屋さんで本の匂いに包まれてさえいれば、自分は自由になれるのだと信じていた。一冊本を手に取り、ページをめくるだけで、普段より深く息が吸い込めるようだった。しかし、貧乏な高校生にとって本は高価な品で、買いたい本と出会っても、「学校の図書室で探そう。そうすればタダだ」とつぶやき、⁽¹⁾結局棚に戻してしまうのが常だった。

高校三年の冬休み、旭川沿いに建つホテルのレストランでウェイトレスのアルバイトをした。お正月の早朝、川沿いの道を自転車で走っていると、凍える空の向こうから朝日が姿を現した。生まれだばかりの太陽の光に向かって走りながら、ああ、今日もお釣りを間違えて怒られるだろうか、それともメニューを聞き間違えて怒られるだろうか、とびくびくしていた。

それでも自分の力で働いていることが、うれしくてならなかった。このまま光を突き抜けて走ってゆけば、もっと広い世界にだどり着けるのではないだろうか、という予感に包まれていた。アルバイトの最終日、いただいた封筒を携え、私は一番に本屋さんへ行った。生まれて初めて稼いだアルバイト代で買ったのは、『万葉集』だった。

初めての町を旅した時の記憶もまだ、川の風景と切り離しがたく心に刻まれている。パリのセーヌ川、プラハのヴルタヴァ川、ウィーンのドナウ川、ロンドンのテムズ川、ケルンのライン川、アウシュビッツのソウア川、アルルのローヌ川……。文学祭出席のため、朗読会のため、^(b)シゴザイのため、さまざまな目的でそれらの町を訪れたが、一歩日本を出た途端、舌応なく無口になるのは、どこでも同じだった。小説を書いている者が言葉奪われると、必要以上に不安に陥っておどおどしてしまう。その国の言葉で翻訳された自分の本を目の前にしても、なぜか^(c)毅然としていられず、自分がそれを書いたなどとはとても信じられない気分になるのだった。

だから私は気分をしつかりさせるため、⁽²⁾かつと目を見開いて、何度もその町の地図を眺めた。迷子にならないよう、自分の今いる場所を見失わないよう、見慣れないアルファベットが並ぶ地図を指でなぞった。

地図の真ん中には川が流れていた。それは私にとって大事な道標だった。今晚サイン会をする書店は左岸にある、明日シンポジウムが開かれるホールは東岸の旧市街地にある、と川を頼りにして確かめておけば、迷子になるはずもなかった。

遠い小さな国からやってきた、頼りなげな作家の言葉を、人々は真剣に聞き取ってくれた。たとえ喋る言葉は違っても、小説を書く人間に対する尊重の念が伝わってきて、私は恐縮してしまった。と同時に、長い時間飛行機に乗ってやって来て、やっぱりよかったなあと思ひ、世界中どこにでも小説を必要としている人々がいるという事実、励まされる思いがした。

小説が上手く書けない時、私は遠いどこかの町を思い浮かべる。もちろんその町には川が流れている。その川を渡り、小さな書店やホールへ、恐る恐る足を踏み入れる自分を思い出す。目の前には言葉の通じない人々が待っている。私は⁽³⁾拙い自分の小説について、一体誰が私の言うことになど興味を示すのだろうか心配しながら、ぼそぼそと喋る。ところが私の心配をよそに、皆は一言でも聞き逃すまいという意気込みで、こちらを見つめている。私が書いた小説を手に取り、ページをめくり、「サインをお願いします」と言って本を差し出す。日本語とアルファベット、両方でサインをすると、その人ははにかむような笑顔を見せ、「ありがとう」と言ってくれる。

その笑顔を思い出せば、また小説を書く元気が戻ってくる。

結婚して*川沿いの社宅に引っ越してきた時、私はまだ作家になっていなかった。自分の書いた小説を発表できたらどんなにいいだろうと夢見ながら、心のどこかでは、きつと無理に違いないとあきらめていた。

社宅は3Kの間取りで、どこかのコンセントに掃除機をつなげば、それで全部の部屋が掃除できるくらい狭かったが、南側に高梁川の河口とそれに続く海が見え、眺めだけは広々としていた。私は台所の、二人きりしか座れない小さな食卓で小説を書いた。誰に読んでもらう当てもなく、それでもとにかく書いた。水島のコンビニで働いていた主人は忙しく、夜遅くまで帰ってこなかったから、時間はたっぷりあった。食卓の上にはラップをかぶせたお皿、流し台には汚れたままの食器、ガス台にはお鍋。⁽³⁾そういうものたちに囲まれながら、現実の生活とはかけ離れた想像の世界を旅していた。

ふと目を上げると、窓の向こう、暗闇の中には高梁川が横たわっていた。流れは緩やかで、その気配はあくまでも静かだった。

新人賞に応募した私の小説が、最終選考に残りましたという電話が掛かってきたのは、社宅に移り住んで二年ほどが過ぎた、夏の終わりだった。受話器から聞こえてくる編集者の声、とても綺麗なバリトンだったのをよく覚えている。

最終選考に残ったということは、選考委員の先生に原稿を読んでもらえるのだ。もうそれだけで十分じゃないか。だってつい昨日まで、誰一人私の小説を読んでもくれる人などいなかったのだから。いや、このチャンスを逃してはいけない。新人賞がもらえるかももらえないか、どちらにしても、もっといい小説を書かなければ……。そんな思いが駆け巡る中、もう一人の私は、汗ばむ手で受話器を握り、⁽⁴⁾「ああ、何て素敵な声の人なのだろう」とつぶやいていた。

次の年、夏のはじめ頃、芥川賞の候補になりましたとの知らせが届いた。夕方、晩飯の支度をしていると呼び鈴がなり、玄関の外に郵便屋さんが立っていた。ドアを開けた途端、郵便屋さんの向こうの空に広がる、まるで作り物のように見事な夕焼けが目に飛び込んできた。その夕焼けの中を、高梁川が普段どおりに流れていた。

これほど美しい夕焼けを自分はかつて一度も見ただことはなかったし、これから先も目にすることはないだろう。今自分は、生涯で最も美しい夕焼けの中にいるのだと、私は確信した。郵便屋さんが手渡してくれた速達は、薄っぺらで味気ないただの茶封筒だったが、中味は⁽⁵⁾かけがえのないものだった。

しかし、小説ばかりに構っている場合ではなくなっていた。赤ん坊が生まれたのだ。食卓には書きかけの原稿、ガス台には作りかけの料理、ベビーベッドには赤ん坊。一日中狭い社宅をくるくる駆けずり回っても、何一つ思い通りにはかどらなかった。

当時まだ紙おむつが出始めたばかりで、紙おむつで育てると子供の情緒に影響する、などという根拠のない噂があり、新米ママの私もすっかりその噂を信じてあくまでも布おむつにこだわっていた。楽をするとそのツケが全部子供に回りそうで、怖かったのだ。子育てとは一生懸命苦労してしなければならないものだ、と信じ込んでいた。

だから一日に何度もベランダに出て布おむつを干した。皺が寄って「わい、わい、わい、わい」とぴんと引く張って、何枚も何枚も洗濯バサミで止めていった。⁽⁶⁾「明日になればどうせまだすぐ汚れてしまうものを、綺麗に洗ってお日様に当てた。」

ベランダからは高梁川が見えた。けれど風景に心を寄せ、深呼吸をするゆとりなど私にはなかった。

不思議と小説を休むことは思わなかった。しばらく子育てに専念して、一段落したらまだ書けばいい、などとゆっくりに将来を設計する⁽⁷⁾「三〇〇〇」やえなく、目の前にある仕事をやり遂げるだけで精一杯だった。どんなに忙しくても、小説を書くのをやめてしまったらおしまいだと、自分で自分を脅迫していた。別に私一人が小説を書かないからといって、何がおしまいになる訳でもないのに、結婚と仕事と子育ての三つがいつべんに押し寄せてきたそのどろどろさに圧倒され、神経がどこかで麻痺していたのかもしれない。

仕事で東京へ向かう時、家から新倉敷駅まで高梁川沿いの土手を車で走る。やがて土手はずれ、川が見えなくなるにつれ、気持ちも仕事の方向へ集中してゆく。もちろんおばあちゃんに預けてきた子供のことは気になるが、そればかりに気を取られてもいられない。おばあちゃんに抱かれ、機嫌よくバイバイをしていた子供の姿を思い浮かべ、気が済むまで心の中

で手を振ったら、あとはもう東京に乗り込んでゆけただけだ。

反対に、仕事を終え、新幹線を降り、車の窓から高梁川が見えてくると、東京での出来事は全部遠ざかってゆく。子供のおむつのことがだんだん気になってくる。

どんなに長い間留守にしていっても、どんなに遠くへ旅をしても、⁽⁷⁾必ず高梁川は変わらない姿で私を待っていてくれる。私の居場所を指し示してくれている。

縁あって、六年前に倉敷から芦屋へ引っ越した。芦屋には芦屋川がある。旭川や高梁川のように大きな川ではないが、それでもちゃんと町の真ん中に川が流れていることは、私を安堵させる。

川べりを犬と一緒に歩いていると、故郷の川のことを思い出す。水の流れのそばにいて、人はなぜこんなにも心が安らかになれるのか不思議に思う。高梁川の近くに暮らしていた頃は、ゆっくり散歩をする暇もなかったけれど、食卓から、ベランダから無意識に川を眺めては、ぞわつく心を落ち着かせていたのかもしれない。

人生で一番忙しかったあの時に、黙って私に寄り添ってくれた高梁川。⁽⁸⁾川に感謝する、というのはおかしなだろうか。いや、そんなことはない。このページを借りて、堂々と感謝しよう。もちろん高梁川は、何の見返りも求めない。

* 旭川：岡山県中央、岡山市中央部を流れる川。

高梁川：岡山県西部、倉敷市中央部を流れる川。

問一 傍線部〈a〉・〈c〉の漢字と同じ漢字を含むものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい。

- 〈a〉 シカイ
- ① 堤防がケツカイした
 - ② 鍵をカイジヨする
 - ③ 患者がカイフクする
 - ④ 新製品をカイハツした
 - ⑤ 体力のゲンカイを知る
- 〈b〉 ショサイ
- ① ショイロの鳥居が並ら
 - ② ショジョツの説明をつける
 - ③ 彼を事情チヨウショクする
 - ④ トクショクな道具を使う
 - ⑤ 予防セツショクをする
- 〈c〉 ヨウウ
- ① ヨウフクに暮らしている
 - ② 熱心にカンヨウされた
 - ③ ヨウヨウ期限が近い
 - ④ 一刻のヨウヨもない
 - ⑤ ヨウガな装いで現れた

問二 漢字の読みをひらがなで書いたとき、傍線部〈A〉・〈B〉の傍線部の読みと最初の一字が共通するものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい。

- 〈A〉 毅然
- ① 震撼
 - ② 憤慨
 - ③ 享受
 - ④ 我慢
 - ⑤ 勃発
- 〈B〉 拙い
- ① 覆う
 - ② 疑う
 - ③ 従う
 - ④ 誓う
 - ⑤ 償う

問三 傍線部(1)「結局棚に戻ってしまうのが常だった」とあるが、その理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 筆者は、友だちのいない学校から離れ、親から干渉されない本屋という場所で自由を感じたかったが、本の世界だけでは孤独を埋められなかったから。
- ② 筆者は、親や学校から抜け出すために、自由になれる本の時間に没頭したが、お金が無かったため、本屋で購入せずに図書館で探そうと思ひなおしたから。
- ③ 筆者は、学校や家庭での孤独感を紛らわせるために本屋を訪れたが、本屋では欲しい本が見つからないため、図書館で借りたほうが早いと考えたから。
- ④ 筆者は、学校や親から離れる代わりに、本屋という自由な場所を満喫したが、徐々に読みたい本が無くなったため、図書館で借りて読もうとしたから。
- ⑤ 筆者は、本によって学校や家庭の不自由さから解放されているが、本屋では欲しい本の内容が読めないため、まずは図書館で借りようと思ったから。

問四 傍線部(2)「かっと目を見開いて、何度もその町の地図を眺めた」とあるが、この表現から読み取れる筆者の状況として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 多くの町を訪れたことで好奇心が摩耗され、自分の本を目にしても、どこか他人事のような気分になったため、地図を見て新たな行き先を考えようとしている。
- ② 言葉が思うように話せずに、自己が不確かなものとなった不安を払拭するために、何度もその町の地図を見て、自分の本が置いてある場所を探そうとしている。
- ③ 訪れた土地の言葉が話せず、知らない場所の地理に対する不安感から、自分の居場所が分からなくなならないように、何度も地図を見て覚えようとしている。
- ④ 日本を離れ、異国の地で言葉を失った自分が何者であるのか分からなくなり、地図上の現在地を確認することで、自分の心のありかを確かめようとしている。
- ⑤ 翻訳された自分の本を目にしても、他国で認められたことの現実を信じられず、今いる場所を地図で確認することで自分の立ち位置を把握しようとしている。

問五 傍線部(3)「そういうものたち」とは、具体的にどのようなものか。最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 高梁川の河口とそれに続いている海といった、謎に満ちた神秘的な世界
- ② 誰のためでもなく夢中で書いた小説といった、溢れ出る才能と情熱の塊
- ③ 一人しか座れない小さな食卓といった、子供が生まれる前の思い出の品
- ④ 眺めが広々とした部屋といった、幸福に浸ることができる心地よい空間
- ⑤ ラップをかけた皿、汚れたままの食器といった、日常生活から出る残骸

問六 傍線部(4)「ああ、何て素敵なお声の人なのだろう、とつらやっていた」とあるが、このときの筆者の様子として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 最終選考に残ったことは嬉しいが、さらに選考委員の目に止まり、何としても新人賞をもらいたいと気持ちが高かったが、もう一人の自分は相手の声の質を分析できくらい落ち着いていた。
- ② 最終選考に残ったことを告げる編集者の声を聞き、自分が置かれている状況に嬉しさを感じると同時に、その時受話器から聞こえてきた美しいものと共鳴したような感覚を味わっていた。
- ③ 選考委員に読んでもらえるのか、新人賞がとれるのか、いい小説を書かなければいけないといった様々な思いが交差する中、最終選考に残ったことが本当かを確かめるように相手に確認をした。
- ④ 最終選考に残ったことを告げる声がとても素敵だったため緊張してしまい、その事実を受け止めきれず、頭の中が混乱していたが、全く関係のないことをつらやくことで冷静になろうとした。
- ⑤ 最終選考に残ったことに驚いたと同時に、誰も自分の小説を読んでくれなかった過去への失望が蘇ってきたため、相手の声を客観的に褒めることで自分自身を鼓舞して勇気を出そうとした。

問七 傍線部(5)「かけがえのないもの」を表す四字熟語として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 有象無象
- ② 門外不出
- ③ 唯一無二
- ④ 一刻千金
- ⑤ 千載一遇

問八 傍線部(6)「明日になればどうせまたすぐ汚れてしまうものを、綺麗に洗ってお日様に当てた」とあるが、この表現から読み取る筆者の状況として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 子供の情緒に影響するという噂を信じ、布おむつにこだわった筆者は、すぐに汚れ、何度も洗濯をしなければならないことに手間を感じたが、自分が一生懸命苦労したことと子供がいつか報いてくれると期待しながら、日に何度も布おむつを干していた。
- ② 子育ては苦労をしなければいけないという気持ちから、洗濯の手間が省ける紙おむつを選ばなかった筆者は、洗濯してもすぐに汚れてしまう現実に辟易するが、布おむつのほうが子供の情緒に良いのだと周囲と自分に言い聞かせ、丹念に洗濯をおこなった。
- ③ 子供の情緒に影響するという噂を信じ、紙おむつを選ばなかった筆者は、布おむつがすぐに汚れて、一日に何度も洗濯を干さなければならないことに驚いたが、あえて手間がかかる布おむつを使っている自分を誇らしく思い、干す動作も丁寧になった。
- ④ 紙おむつが出始めて手に入りにくく、仕方なく布おむつを使っていた筆者は、汚れた端から洗濯をしなければ替えが無くなることに愕然としたが、苦労をすることが子育てにおいて美德であると自分を納得させ、一日に何枚も布おむつを干していた。
- ⑤ 紙おむつは子供の情緒に影響するという噂を信じて布おむつにこだわっていた筆者は、洗濯してもすぐに汚れてしまうことに虚しさを覚えつつ、手間を惜しむと、その分のツケが子供に回るかもしれないという気持ちから、丁寧に布おむつを干していた。

問九 傍線部(7)「必ず高梁川は変わらぬ姿で私を待っている」とあるが、「川」は筆者にとってどのようなものか。最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 忙しい日々を追われ、心にゆとりがなく神経をすり減らしていたときも、長期間留守にしているときでも、変わらない姿で流れている川に筆者は圧倒され、この偉大な自然のように強く生きていこうと思わせてくれるもの。
- ② 川を境に、筆者は仕事人としての自分になったり、母親の自分に戻ったりすることができ、どんなときでも変わらずに待っている川は、人生の分岐点では進むべき道を指し示し、迷っている自分を導いてくれるもの。
- ③ 結婚、仕事、子育てといったことに押しつぶされそうになっている中で、川が変わらずに待っていることが、筆者にとって心の拠り所となり、自分がどこに帰るべきか、どこに自分の居場所があるのかを示してくれるもの。
- ④ 日々に忙殺され、小説を書くのをやめたら終わりと自分を追い詰めていたときでも、川はいつも同じ姿でそこにあり続け、筆者にとっての「変わらないもの」や「帰る場所」を象徴し、作家の自覚を取り戻してくれるもの。
- ⑤ 川から離れると仕事のほうへ気持ちが集中して、帰路で再び川が見えると家庭や子供に心を戻すように、いつも変わらずに待ってくれる悠々とした川の姿は、筆者の辛い感情をなだめて闘争心を呼び覚ましてくれるもの。

問十 傍線部(8)「川に感謝する、というのはおかしいだろうか。いや、そんなことはない」とあるが、この表現方法についての説明として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 断定を強調するために、言いたいことと反対の内容を疑問形で述べる表現方法
- ② 心情や主張を緩めるために、直接的な表現を用いず、遠回しに伝える表現方法
- ③ 文章の印象を強くするために、対応する語句を同じ組み立てで並べる表現方法
- ④ 言いたいことを明確にするために、人間以外のものを人間に見立てる表現方法
- ⑤ 心情や主張をより伝えるために、文章の語順を入れ替える形で述べる表現方法

